湖月抄

あつまや 六

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

竹河 匂宮の巻の二

細 巻ノ名ハ以テ哥并ニ詞ヲ号ス之ヲ 詞 竹河をうたひてことに出して、まかなり 哥 竹河のはしうち出し一ふしにふかき心のそこはしりきや。此外三首あり 細 横乃巻く又末もの堅乃ごとし。薫十四さいより書て次の年正月より七月まで書て又次乃年の末まであり。又年はありくとありて年ノくはしからず 明星抄

薫の暴進并 年紀 所説 此巻よりかはると四位侍従十四又かはりとみへかはる八十四の年二月に侍従に任せらるにし匂宮巻にみえしより。さて又その末に中納言になりたまふ事は。ませりかはる中納言になりたる年之椎本に宰相中将（薫二十九さい）匂宮とかきたまへりその年乃秋の中ころがはる廿二歳の時に匂

7152

これは源氏の作らるゝおこりを
細 此発端業式ア作之
見せらるゝその人のいはく、
る事の様よりけり源
氏の作らるゝみもとあれ
とは紀氏説いふ紫式
といふよあるところに紫式部と
いふ定め其の宮
るれどひがころ定める
ともにさもの式部は源氏の作
まく宮よりゆるしく
是はこれにも式部は出
ものせる紫式部の作に其の
ことどもとさしていふ
業のゆかりをおさめれど
細 紫式部と源氏の作を
まで後に紫式部は
作りて後よりけるを
れまでりやくぶらるゝ。
きて物ざめれどはらるゝ
此事統いて
ひがゝ此のまじりて
よ未ふかく下説其ひかゞ
細 紫式
事といふは統出流を相兼

これはげんじの物がたりをつくりける
花 此孫く物がたりの作らるゝにおもむきは
細 此はよるきより
しよくの大殿よりよあはれなること
河 悪後定師口
ものがたりのつくられけるは
毛作りし時を今出侍
るまゝ女房衆
しかるはむかしの物がたりをふかき
めれども女どものひきゝは源氏の作
仰是は上翔よそろしかりてものゝよく
もさくよびかくともの事をもて明々
事はあれありをとし事もてつゝあがるさ
さるん人のひがことやすくあやしかり
ろういつまでは見ましをとん内侍のうき乃
愚案 是作とかも作者よ女とをなつる之
細 此書式部のうすとい
たゝよ首衆の作よはゆきと二人女二人
其出式部の是の息之
あんおりしかるとぞ尚ぐよりつきさそん
ことばをとそしと一月のさる物語

宮巻之十四才より十九歳の秋宰相中将に任ぜらるまで
のまき也。是をわけて此ほどに白紙書たるは横の并也。然ル白
紙書きは中納言のまき也。然ども中納言に任ぜらるゝ
又竪并といふなるべし。竪横を兼たる并なるべし　三 同箋
三日雨論 当流乃習ひ并の巻に年紀乃義不用也
人之為、依為列傳也。諸抄乃趣一概に信ずべからず。
まどをとけつべきなり

の寺に此はみなかしこ源氏君藤壺に密通しくまふとあるなり。玉鬘ハ始終の中にも
の御むすめなれど夕良上の御ことのかくまつひまつりとりける
て柏木女三宮にまよひて生まれ給ふ又の事を略記
我ものも生れの趣 細 若紫よりの女三宮のいひとひのみならん紅梅
のまゝでたらりて紅く老ら人のいひをもとの世をりひ
いづれ又まちしく 細 若菜を後して式部の子ら給ふ 師 此段
しこふづれ実をうつらんと思ふめぐさるわが心地

なぐり給ふ程よおへぐすくうを給ふしとば 細 ひけ黒の蓮き事しまゝく
夏のやうみゑくいつしかとけいそぐこ地ほし給。 細 内侍のかみのそのうち
いかやづくへをなどとこうのぬる人の心町よる乃 鬚黒の大臣の事よえぞせうかへの覚
こまろわざなりかれバさばかりのまけひ 後よハかられ乃かうべく 盛 戒勢く
いろめごくむかしきてしかとくのはるかおびら ひけ黒のそく 孟 花衣六
からの浦しうしく抱。らうじ給とそうみぐ。 おもをそくて乃之 河 領給
そのくさ此地どろへえるを出しとえらきの 外ちぬ乃はなち給
かこさ徴引うへしるやうよ房のしられめ 鬚黒の大臣か人らかりける

こよのくるとけるこうしたれ
三 故殿く元より鬚黒の性よらかく。通屈なく
こほくかんとあとを
よえてこうよるまけをを
らうしとハあとやうよせ
まこさごふかのかまえ
しらくしさすざ
哢 或人よハよくみえさ
とわらぬく 盃 心のむ
らいしろうらく
心をられまふかもわうけ
おなゆるうるや 孟 鬚黒
の人よ親しくるまし人
なれバそしゆりまて玉鬘
りよく義むかくしま鬚
おまひかれてとらくあさく
太の大殿 細 夕霧も大切
かまへく 師 紅梅事に

やうよなりゆくうんのまい乃ほかくまつりり。 細 役位の大臣かどのかまへ 貴人の勧賞
そうりしくそへよまのそうりまへど中く ハたうしうかなりて
唐人で、なまさ此そのうしひのしりとゝらも
あらうしくづるまてまゝそのかくなるけそ 鬚黒く
としとくれむかしくあさすざさまするなの
はなどよみくゝとなれ給くゝろるわかりる
ゆるりみやゝされのをとえうすうつしきてし
えれやひ給つきて六条院かにはをくて秋好 源氏く 細 玉
よくそらくばかものへとさてまてはせあの よ變なあり 源の大臣のもの
るん後のことおし出とはこまへる此そく小ん のなをも古とさきまひしく
のかくともりよも中かくのはつきまふくれ 細 此の中くる 孟 玉かつらの
なりまへれバ太の大殿るとは中くるの ろ源の遺言え 孟 夕霧も玉へ対してわくまうける

八あつしくの事也それ
八病気の事に用い始より
後の事なるべし
と云々

世のためし 孟 あやまり
の事と定むべき事とあり
し 孟之
世のためしにもなりぬべき 細 それと
おぼえぬ程の事をそしりて
後の人のためしにもなるべし 孟之

うらみをおふつもりにやありけんいとあつしく
やしなひ 男 上達部 八 上人 服 ろずして 孟 三位の上達之 三位以上皆右大弁以中将
なりゆき物心ぼそげにさとがちなるを 孟 殿上の藤原之
いよいよあかずあはれなる物におぼして 孟 夜は殿上にさぶらひたまふべし
人のそしりをもえはゞからせ給はず 細 世のためしの事
世のためしにもなりぬべき御もてなし也 禁
上達部上人なども あいなく 孟之
めをそばめつゝいとまばゆき人の御おぼえ也
もろこしにもかゝる事のおこりにこそ世も
みだれあしかりけれと 今上の御事
やうやう天の下にもあぢきなう 細 御息所の事
人のもてなやみぐさになりて 花 安禄山が明皇の時の乱を
いふ

ちやうごんかのめとそばむるといふ
細 上陽人の詞 未容君王得見面 已被楊
妃遥側目 白氏文集上陽人
ほんの事をいふ事也むかし 細 あり
三十あまりでは舞曲をよくし
たる人なりし也 遺恨之
ぶんこすぐさまをを思ひしき
細 御位をさりたまふ
孟 今の御事をさして云也
それなりけれどもそく
是非の事をいふ孟の説
また此事は細の説
可然。

あれ八余人八滴をとるといふ 師 おほくの姫君のうち
しほめつゝいとまばゆき人の御おぼえ也
もろこしにもかゝる事のおこりに
こそ世もみだれあしかりけれと 孟 なぞ
やうやう天の下にもあぢきなう
人のもてなやみぐさになりて 孟 姫君まいらせたまふ
楊貴妃のためしも引出つべく
なりゆくにいとはしたなき事
多かれど 細 今の泉涌寺の御事
かたじけなき御心ばへのたぐひ
なきをたのみにてまじらひ給ふ
ちゝの大納言はなくなりて 細 ゆゑ
はゝ北の方なんいにしへの人の 細 おほくの人の
よしあるにて おほくの事を任せて 皆舞曲をよくせし

むすめもたる　二　子の世に
とかく思ひ出むとめ
の名残まてもてはやさるゝことを
又盛されんとなく
人さくまいりしことも
細 おもしろしの文字
心そこきえの字の文字なれ
と当時の事也
いつもまつけなくも
細 夕霧の息蔵人のかね
てよりのそのみかど
夕霧は源氏の孫なれは
なり

すくせにて思ひのほかに心づきなしと
（冷泉よく）思されにしかはづかしうかたじけな
きを、この世のすゑにや御らんじなをされ
ましなどさだめかね給ふ。かたちいとよしと
きこしめしおきて心かけ申給ふ人
おほかり。右のおほとのゝ蔵人の少将とかい
ひしハ三条どのゝ御腹にて、あにきみたち
よりもひきこしいみじうかしづき給ひ人が
らもいとおかしかりけり。いとねんごろに申給ふ。
いづかたにつけても、もてはなれ給はぬ御
なからひなれば、この君だちのむつびまゐ
り給ひなどするハ、けどほくもてなし給

（孟 玉かつらの姫君を冷泉へ）
（三 夕霧の三男雲井鴈の腹也）
（蔵人尚侍のこと）
（夕霧の息なれば蔵人ハ尚侍なる）

いとしろびやう　細 浅官
ならとをうりのかしこく
まうぎとして叙昇なる
となり
姫君とをぼしなるよ
孟 思ひなどハさせ給はさ
人蔵人少将などの実人
にてもおろかのく。
異 と人にハおぼえ

はず。女房にもけぢかくなれよりつゝ思ふ
ことをかたらふにもたよりありて、よるひる
あたりさらぬみゝかしかましさを、うるさ
きものゝ心ぐるしきに、かんの殿もおぼし
たり。母きたの方の御ふみもしば〳〵たてまつり
給ひて、いとかろびたる程に侍めれど、おぼしゆる
す方もやとなん、おとゞもきこえ給ひける。
姫君をばさらにたゞのさまにもおぼし
おきて給はず。中の君をなん、いますこし
よのおぼえかろ〳〵しからぬほどになずらひ
ならば、さもやとおぼしける。ゆるし給はず
は、ぬすみもとりつべく、むくつけきまで

（女房達して蔵人が尚侍の姫君の事を語る也）
（細 うるさく）
（細 雲井居之事　異 尚侍の母のこと）
（尚侍のこと玉かつらへ夕霧よりやさしく聞之）
（夕霧も是をゆるし玉へりと）
（玉の嫡女のこと）
（細 次の君ハ蔵人が所望もなくてハゆるしもと也）
（孟 蔵人尚侍のこと）

こよなきこと〳〵は
細 あるじからずとは云ひ
ならずれ尤よし 師説
侍従と姫君ぐちの詞也
しるきに似合ぬまじき
ずとさのをへちへひ
あそこねども不通のす
え外世もろくしと
てとし
ましてんとて 孟 又云
れ給へ 細 自然又ぬを
ことなりあるべきことなす
とをくく割出をとらへ
こなふ之
四位侍従 細 薫之十四
なるとあるを白氏
の尊此侍従にあるたり
師説にも白氏文集にも
十四にて二月に侍従なり
なりなり秋右近中将
になりて侍従になり
のかみとも見えたり
つり官中将と見給
と此巻三十年の事

とゝり。ようさきこしとは侍るなど。女
ごのうへゆるし給はぬことのまぎれ
あるは世のをこしぞくもあまたつけきこえざ
るれど。さることしつゞく人とも。あるみりしとや
まちひさいげなどの給ふによそこされて
おんおりつくりもち。六条院の御すゑに
朱雀院のみや御腹にむまれ給へりし
君。冷泉院にみこのやうにおぼしかしづく
四位の侍従。その比十四五ばかりにて。いとき
びはにおさなかるべきほどよりは。心をきて
おとなしく。めやすく。人にまさりたる
おひさきしるく物し給ふを。ないしのかみの君は

（傍注）花 蔵之又下之思案仲　細 此以下薫のこと　立せんのみもそこされてとく　花 是ハ白氏の詩にあらはれ紅梅よりあとのこと　孟

一四位侍従かほるのこと式部源
侍従といふは中将と
いふなるべきつけたる
まくに侍従とかくへるに
や。源氏君を太上天皇
の後を相たとも。柏
木右納言とあられ右衛
門督のといふごとくされ
なりてるなどいへるにて
是也とす　三光の
中混乱せる故に四位と
かくいふは雑知る事あ
系図をもくしとある
しきハ此説也

むこにても見まほしくおぼしたり
此殿は。かの三条の宮といとちかきほどなれば。さる
べきおり〳〵のあそびどころには。君だちにひ
かれて見え給ふ時々あり。心にくき女のお
はする所なれば。わかき男の心づかひせぬな
う。見えしらがひ。さまよふ中に。かたちの
よさは。このたちさらぬ蔵人の少将。なつか
しく心はづかしげになまめいたるかた
は。この四位の侍従の御ありさまに似る人ぞ
なかりける。六条院の御けはひちかうと思
ひなすが。心ことなるにやあらん。世中におのづ
からもてかしづかれたる人。わかき人々

（傍注）細 女三宮の三条の宮　箋 舞黒のこと　孟 夕霧のこと　細 薫は源氏に近しと思ひなすと敬うこと　薫之こと

その比にさこそみてこれとくん
孟 右のうへの心よ源の氏
形見よ八雅とみんぞ夕
霧の左大臣にいとぐしく
て對面もかたければ
とて四位侍従と兄弟の
列よと仰なり
み君もさるべき　孟 薫を
右のうへの兄弟の列よ志
まふ故よ薫も志たし
く志たまふ

此あぜちの大納言
花 紅梅の大臣此比大納言
なり

き人〴〵心ことにめでたがる。かんのとの
も、げにこそめやすけれなどのたまひて（薫と御かたらひ）
なつかしう物などきこえ給ふ。院の御心（源氏の事）（三条の宮の事）
ばへを思ひいできこえて、なぐさむよなう（玉鬘の心）
いみじうのみおもほゆるを、その御かた
みにも、たれをかはみたてまつらむ。右の（薫）
大臣は、こと〴〵しき御ほどにて、ついで
なきたいめんもかたきをなどのたまひて（夕霧之）
はらからのつらにおもひきこえ給へれば
かの君も、さるべき所におもひてまゐり給ふ。
世のつねのすき〴〵しさもみえず（孟 薫寛治なりと）
いといたうしづまりたるをぞ、こゝかしこ
のわかき人ども、くちおしくさう〴〵しき（孟 もとは薫の事也）

ことにおもひていひなやましける。む月の（細 玉かつら のわ方）
ついたちころ、かんの君の御はらからの大（へ また之）
納言、たかさごうたひしよ、藤中納言、故大（細 此大納言の頭よきこゆ）（孟 髭黒の嫡子 玉鬘の継子）
殿の太郎、まきばしらのひとつはらな（細 是も藤中納言の頭よきこゆ）
どまゐりたまへり。右のおとゞも、みこども六人（孟 夕霧之）
ながらひきつれておはしたり。御かたちより（玉鬘へ之）
はじめて、あかぬことなくみゆる人の（細 夕霧とのこり）
御ありさま、おぼえなり。きんだちもさま（夕霧の子息達之）
ざまいときよげにて、としのほどよりは（細 夕霧の君達名昇進も早）（イ ニナニ）
つかさ位もすぎつゝ、なにごとをおもふらむと（迷ふり人之）
みえたり。よとゝもに、くら人の君は（細 蔵人へ少将の事）
かしづかれたるさまことなれど、

細 姫君の事をいふなり
さありて、ちふこしありがおるら。ましくは加
こちらうく
木丁へだてゝ、背よりかくしぞ此物語にて
細 夕顔の詞
あふぞのこしうちてちかくもえう
孟 夕顔のむすめ
け給へるぞ、そのつぞそれへまくよ、内まい
青のをし
まいりかのありまでじけるくしく
かくおもれバつめしへの此物語をこそて
まかりしそがりくむくもぞりしうせたるん。
夕の事の事 河原 男共 傍人日 遊仙窟
御そさとのこだいさうべさしとゆはめし
細 誉ゑらるゝ事をいふ
つゝくせまへ、おそのくずしゆらんぞされ
細 むさうの詞
あしいかしめ給まどまし給。今ハゝく世
まみかりそみとあくぬやうまかり紀
孟 源のをし
わりさ御をとぞくぞまかりよかん。色ぬ

さりしかりも
なにかとつゝみひかへる 細 源氏
し源氏の遺徳しく
院より 栗 冷泉院より
姫君の事の作し
院へげは此位を
孟 脱屣あれどもわく
おしはかりまし 思悔前
まほどすさ給しきと
おりし 詞はあるうて
なみえし

しゐしくもいとくあれげなく、とふかまへ
られなくとり給ひもつゐてよ。院よりの
よ御めすかし、おのめりしさて給、つる
ぐらちうらうさるさ人のまじらひハ、
中くをかしきまでとなく、さのへるんせ
細 夕顔の詞
づゝかりきまへでん。内よ女房をうちくこ
禁中と院とを
とのあるまよけ給つりしを、いづこよ
おりしさきゝへまくよりゝ院へげよ此
位をさせみくるみそ、さかりをさうく
おえれどもよあかりてされあかりて御え。
かりぐくのとおもしかりすゝめかとよう
しかひおちなかし給ふしゝまのはしとい

まことに女一宮の女御たん
細 冷泉院の女御殺徽殿大
臣女女一宮の御母也冷泉院の
と御かはりは見当也
師 よしとは源氏をおもて宗
と女一宮の御母弘徽殿と
玉鬘も見当るれば姫
君まゐりせまでさきすゞは
玉鬘の御事ありと玉鬘
の未定ありて 三日夜
女御まんいりては
孟 玉鬘の是も女御より
さぶらはむつかしく
いまどきぶらはひまいり
女房のおくめすくはなと
でもひとつべきすゞ
わびてもすゝめらして
よつにてかうぜさせども
そひかけ
三条宮には 細 女三宮の
藤壺女御夕霧の北方をし

えりなまめかしげなる御中にも殊（孟 歴々の女御たちの中に更衣よりのちかきさまをいふ）
にらふべきものゝ侍らざらん。口おしう
わかき人のいまは女一宮の御かたは、
ゆるしなくまかせや。さゝめくの人かなう（りこうなる女の今も今々の様）
のそのよしさだめがたうこそあれ（そやうなること）給
しくわかきんは女御かんづまくものぜ（二おもての御 冷泉院おりおのゝられ 冷泉院と女御）
かくなむはかりあらさ侍るもかのおほやけ（里なかりしこと）
うちとゞきおもてなどさめますにつきなど（と同じく姫君と仰見そへし）
かすめおぼつけて、いづかたにも
さよりなきよろしかるんと心ざし給はれて（細 玉かつらの御方之 大納言殿中納言などなし）
よつかはしまうしく三条の宮にまいり
給ふ朱雀院のみかど心搆し給へくだんなりし

てんくもまかりかへ 細 是も源氏朱雀院又源氏の御方につけても女三宮の母女御をいへり
さるく院のかたさんにくゝ心に入まうく 師 朱雀院へ心よせまうし人のこと
三条の御院女御まかりまうり
細 うかがふ玉鬘のこと人ま
いりまうり 師 これは十
四五六かうとうひし次
の年の正月の事

院のこゝろにおもくつけて御殿
女三宮とは、まぎれすかくしなき（孟 女三宮之）
ゆかり此殿のおぼ中納言中弁、御殿の君（細 玉鬘の腹之 髭黒の御子三人）
みこもやうそ此くの御侍は出ておは（孟 夕霧の供之）
引つれまゐるいとほひしくなりゆつけ（二幾人しなし 御身の）
て世俗の御殿まかりまかりそこそしまゐ
あふしさを思ひもおもいさいぐくはい（声かろく聞えし今のさま）
づれかはいとびしかる、それめやすかり（晩 大納言夜大納言子の殿まで此御殿なるべし）
つる中に、しうせられてしてもしらぶ給（孟 おりの事なし）
つるのこまよなくめかしくうらうて、御の

物めづくすりわろき人よりハ当代しるら
かりなしいふ公家の歌よの事さるら
みはこれをしりてきかりくべてこれも
さふらひのなけよりてりうる海めう
しきら海してしらかりすひきろよ
わひかみをよのてるなすもん作者も
ゆれじんやきもん人ハげよ人よりハま
さうるかりこころうまきあんりとして
おかりんのとかれハ念誦堂よおいて
こすきかりものきへハびんじのかうしより
のかりて戸ぐちのそすの手へよねまへ
ゆきあすへかきさかの木の梢くれたしハ
くつかえて鶯のその声もいとおかし
なりよいけしすらともすかうしく
さ海のしまへれバ人てそろすさうし
とりよりしもくるのよんふくさ候ど
かりとねさがりて牢籠の意とさあれ
上らうのまことうけ給
寄りてこそいとゞ色ひもまさる
うしろめけむめのか花からる
きまて
しそみそくハりぐてるりとや
ありまになかろ梅の袖花なくバ袖のれて
とまへあとのひとをさよはまうしいろ

山よ云わりといふすの云ぞのさけつのゝや 修成 杌 廣韻樹無枝也
色しらぬ 細 是しらいへくの句也 師 是しらも香こそあはれと思ほゆれ 花
ひのまぐれちとあかく紺入れてこれのの空へ心さしくいとこゝへよりかく

あまりの御返 細 異敷も
いかゞせうらんく前よ
二条院へ八夕まりの所を
くらまりよ来りまうく
所の来衣もせそひ
まおりく

くらうくひさとうし川べくて海よお。
うんのあそびのさまりおぼろげにまゐりて おまろ
ゑ花 ふそのごうらやまんしげるかきめ人
とまへよくしそあらわけ里と色ひて 孟 みりそつれうくあまらかく
のまふとてりまめへとくしそつかまつれる 細 薫のおのつよ中務之
いとらんしうら名り紙とこひねあわり。
あそしの御返殿下などともすぎをれくだ
とかくくとありぞかつしあひたり。
盃 浅香 折敷也
きんうつの御しさからんぐらうしてく
まりのさうへさぞりさしいそまへり

かのれまりさうらん
二おかしの是する 細 三
氏の葉の時ふのうきを
しうりてのまさ

くいへる
我えそいなる 細 ありとかそうき
し霞人之雲霞え人を
あ三國らく

すこれおゝつえん
おかしきけさりおれり
いひし人くのるく思藤秋
下ゝとえそうこ白ひたく

細 夕霧のつよくおゐろうの祖
しいわびもりおよまくよ 盃 よしやりつ
くにおよ似すつく
うくしそいかしまりまつれらのあいつよみ 細 薫之く
三位ゐつしそ名理られ
つる前とこし給ひぬをけらひのゝしえめ
やうよゐりまめつそうりそうのしそゐの所ゐ 源之
かゞうりそひやしうくうざ給しぞおつ 細 源氏のうと色ひら給く
え人しつじとひ知をくさぞしうそ日
これすよゐおゑんともりさうりくさと 葉の縁あのくちらまえ
人ぐいめでらいのぐん家御給のさこ中あぐ 細 葉の心
のみ給られそしとひまれ。大よ日の比 正月之
梅の色ふりうりよ。白ひ色くこうげよそり
うされしすゐ梅うしハこゝへうしと若へしく 細 紅梅の手代給之 イうくえん
斎給院の御りゐよかつしつ。中門入のつ給 もうえ

ろうげんのうひしよき人ゝよ
我は息にかせうらうえん
しくたに匂へる梅の紀を
しゝきうらい中くをひ合
もべし。へ本ようすき書
らうんとして絵をも世せ
ら日まわしがらし。今は紙
まづと思うんと紀を聖り
こんと覚ゆべし

細 葦と門出衣く
よ。ゆるぶるぞしすがきゝろんへさてつまらり。
花 薫人かねのうへ
くれなんとものひわうと。ひきくめうれば
葦のかねとひろしめくうれ
つるよふらまうふかねるろうろ。あへ扇
細 須よ
姫君ようかくられわうくらく
のうゆりてよ。びへこうの琴のこゝろ正
孟 姫君聲く
ふとおどりしてそそなるかりぶうらし。げ
細 うわつのらく
おらうのゆらうーおらる姫君とか粹のそうとりゝくらく
やへのゆらさぬゝしそひらじめんはつとく
あべさりざれときぶしもの声ありゝとわれ
細 うわる恋人のかねよのうへ
べぶざをうぶしまへまうをいふしくらしさ
てひきつれくかのもとよおりよくへろ。紀
ゑひ
梅のまろりしまよ。梅はえなそうぞそう
河 梅殺偶ゝ而不呂 咲
梅はらゑまし
もりけのひの花こらうとちらくぞくさう
細 うらの女房く
かんれはつまどんとしありてんべくわへ
孟 和琴く師ゝ

女の絵うしてゝ
胆 呂八女よ
属せらきしく。漁楽 唐に
八呂八旋律八陽く催馬楽
よ八呂と陽律と旋ふしらう
わや帝子卷よ律の調へ
八女の梅やわくよくうゝる
らしとありされば女よ八五
てらくわかせまくを
そうらうや

古絵仕の子くの
胆 しわうの
乳どうの古ちどの世ぐに
似ようらしと人このよ
と思うしうバかりしさととそ
すゞ絵く師は綱ふあり
鶯のうちもさそてつれ
河 鶯聲誘引来花下よ
師ゑの意よまてそいそ
らく

細 ゆきうかうせしらく
ところくさゝあるとさう。女の琴よまてなる。
葦のふ
の音いらくゝをあはをぬ。といふしよひ
細 女らてり見く
て今ひとうかう。あらうへしううふるぶはも
梅うゑをく
細 代 琵琶
ゑれこゝ中書うちもとくるう
しるすい夜めりしう。君おりてわくるいは
つるおくらぞりしとふとまらぬれば今夜は
そうしくらしけてそうまへくるゝ
孟 業く
薦中らく
しらまら和琴てきしいぞてきうぶ。ゆづ
孟 かうく恋人かねと
辞退く
つまくきふれぬよ。伯賢のきうくしてゝんの
細 おもしの伯父く
む鶯の伯 ちど 三絵仕の古との蔑の聲は隈とそくらう
君。古絵仕の紀しく乃漁乳声よろへしひ
まゐるしきゝとうぶと。もめやうよ扇しく
ゐんとあはおう代鶯みとさそてられか
のうひつうしくれば。わすゝそてつわらふへ
孟 ころうく葉よにありしく葉の心く

の君と　玉ケハ指本
よ似たるとそれを植く
伊成殿むろのうへ
の御説とぞ下ー

きこえつぞおもてまうす
人言　孟　本しらぬ人
なくてと秘えしらとけ
て枝みえし、年来きくその
かれハいりしきものまうし

ことしもあらねとしもそ、ゆきくるに（書の紅葉をと云い）いかでかくさしもしらぬ事をいひて、いひぐさありくさもつるよきすりむつびがほし（細 玉篇のらなと）栽るれど世するおはしますよいとくちを（古）がそゝまよこしてまためつるぐみもあらずすうよいひとちん表あるさらのありはおやしう新之絹その所あり（指南之）さ海よいてしりつおぼこしのねるごしてそれとしそぞそこれそうふうとうらめいすよきうし（御）りうさめや、がねとこる（細 年出ハ）してかほいく（孟 武殿是）見きらうるまでくきうらふう（細）とし（孟）人さし人もおびらるるばめのつうりよ

しらつらり

しまさとうよ　花言咲
ハ男踏前よわからしく
細解云とよくめてうさ
はせしうたく　細 河海説如
同し秘よ
何ども周洞ははらしてふ
するべし　花以前の梅が
え此殿とめし。呂氏前
をいよりや。竹河の言お
よ項て

みまそえぞ
そつきるすしるひもしばし
しるくきぬを誦し云　細 何のうち

あさましくあさびはじめのたゞに（三此竹葉之 君のへの由此後はそしう出なり）一ふしにほひまよりぬるゝやうやうのうさつとくれてさらづさ紙のこともむれいごとがきそゞてのとんつとちづつしかれで竹（竹の葉のかわらく）河とゆうすし声よつごとちくまごさうえれと、おりしうてふもの（孟 篇中にらむうらのへ）ひろくりかうつぞきにいつ、ゑいのもてこそいまのふうしくとつて酒（孟 葉題 酒 酒歌本心とふうらえ 伊洛及）まゐひがしすうりさとぞ安侍れいうよ（修酒で）（さひのちうとけふし）りそあい路そし、とてまうけひらどこうら（細 葉なるを酒と誦しうらえ 孟同）きくさうりうるゆるそあがのひとかくうりし（孟 酒より孫を出さうく）うちそうるとゆりあへうるまくよくづけさ（葉く）まぶるよそもぞあどさうじところ僧隠（葉之）

三絵のそでつまじもかしと
てきぬとさうしろぜん真
もなき梅よあつしの悟
悟よりづらく
こつひしまやまそ
く端歎の時らふ前宗れ　細　竹河
ぜりくくらりあてゝそり。
下ん八ろふますらひるまゝ
とそり。乗　此夜竹河を
ゝまひしらバ端斎まよせ
て弓驛まそといら。ん
く労して曲りる。一よ迁
ミつむまやとハぞうそへうあるず
ありれハうち思のこゝろしを
うさまよしそんてりくそり
暑記　細　人ハ源侍従
へこれ
よん梅のへしら　三根ま
のゝれ人ハ酒葉よらとう
つて我ハ中穴の皇保ま
なさとが将の根之
折りしや　細　女房の中よ
里猿り花の句つりにん

あゝしの侍従
ハあゝしの春よしらうげていぬ。ゑいさ
薫をとひめてぶりまく
とじめて行くれどこうむまやふて夜
薫詞
師あさ人のまね
恵よ多りしてふげよ多り。お杵へこれ深活
孟　薫さここ
悟のまゝそれつり根のめさしちめれへこまん
これよりそ今まをまふらめ。我男ハいでもじ。らん
しつてさひよそりてわらさるまそう。
らむる
弐人合為
人へこれもよふゆとう向きらん桂をまのし。
師　伊九治
小芸の夜乃やさうらるけさそそてつらら
のひとのくし
女房言
折りしや衰もミらん梅の花さてうぢら
薫
およりあへきしかしさよ田侍の侍従乃絆

たゞし折りしれりおかまくしまかんと向さうじく　三かへて
とハ雅とミろべきとく志くれがそてくべつりのるまんのころろるハわらし拍子しなり
かゝり八番とうまそまくくづりのんをみくせり

竹河の　細　ほと八橋と前
の猪とどるり。姫君
とゆらしまへのかもあつ
しん竹河の猪乃つめるや。
云　のまぼ根をハしもまてめ
ぞうしろへしくんぞまてへゆう
せらいふらく
まるがもいとおかしくを
孟薫えいかるらんつゝこ
うりまもきでもよくおハ
しませ。そて哉うの竹まん
迄せしるまぜんとそ秘
しあまめく

細　薫の父の句
まりおまし此侍従のりゝくよ。よ人ハいでしこゝ
アそうりし志貌人でいうるまぞのひまそんへどこ
細　お勢ふもみえてありくそて姫君よりかゝり
あへと幽かりう。うるまぢらよりくさそでらくしに
薫
竹河のあしらそし一ゆしよかうさ
うるのそこハ忘りさやしくさくらりぞまん
お勢の詞へ
夜よりく来りてこれをまてをおまたらず
薫をおあまのみて
をいとおかうしをあかれいるうへくくよ
弐　侍の仕ぐさ
つとうくのひまをん抑さかくてしく浅ふきも
三月二十三日
どうれをりそて家の志どけかうしぬつさ
てまくれと我人とけまさろへきそうてては

ろうしぞうよ　（姫　桜木佐）
の花さかりの盛りなり　ねぐ
おゆみしハ春ゆゑのおり
きこゆるとそろ〳〵めまかに、
いつはわくら
ら人がよむ歌やと　（細　光秋）
あらひまやましとくかり
おかしとんてもとらぬ
しらくし
竹河よ　（細　玉方と早下）
しらくうらうちさらく　（三味）
竹一節でよをつめつくし
さ竹くば指一本あり葉末の
あひやや表を孫ぞまつり
と弾文るとつひ出綿り
あるしとそ孫まれとひ
てこるまぐみも出くぬのと
まんさつのあらつこ近
なまびかしと　（細　葉末の夜竹姫）
の横田におひとろく
わすのとうつりよとえうく
盃おかげんあり落葉よ
心へとかねにかさしもあさ
ても桜かれしいかりかいらりん

桜さく桜の山のさくら花
さく桜われぐら桜あり
桜花ちりくひろふれ葉め
月ぢらりくひろふれの酒ハ
くりとれり
つとそりつき　（細　人えげ）
うらぬ取おすれど姫君道
深ハせうらぐらとおりしと
くば池ゆふくか稲も
名にまうり所むそうの
家うの人かまれきれそ
ろしらうさでくりぬく
死とそえ強とく
名のらぐんへうそろなまうハ
みげろく、
おおの酒よ姫君とハさ
らまでのさ夜ふも宿
しとそてしあつどしわ
まい平人ハへんせしとお
おもくもむのまとく
他名ふてしぞり

（細　おくらの御方志し）あわれとぞげんの花しこ九志ぐらの袖よあ
しわしきこくとおろりしめ給ひつりこしげ
よいつしまりくはくんとうひじまやとすん公
とがめさくし酉めりし
（かしよ竹姫）さげうはよ紙かくうしといそそろしもい
るするかるとやひきうまりしげよひめしとつ
めふらくば君の御ぞうしるよかりつてくろ記
（孟人かねし）だそとらかねのえいとるあらきこる
（盃夜竹姫の葉末よ近付しおうつくぜんとしく）まんいませらが竹姫の君でとげつきらち
（葉末と舞よせましき）よちかるさゆりうそ明くれもひひまやし
うらひかりやまひの姿くさく桜われハぢ
てもひくのりが酒うこの盤やうこうのとや

（細　姫）さまかつきうとそしうよハまきさるかしにまつく
じくろつきとあわきじらめりぞのころ千
（若葉之）八九の頃じめや　おつりんかくうらもらく
ろうへもとらくみぞおしさ姫君のむと
（嫡女之）おがやうるまさう、いま見りしき海
あひくげよさへそそあしらへうげる
かぞ、そしまふ桜の折ぞるか、山かさゑどく
母りよあひらう父おひのうましき稲より
さかいるちすそぞかくあのきやうの三度
（おお）まい落さるやうまに雨ら、降りそおしかとも
（細　中の姫君之）らうくせう、こうろ川りしきさげるへ
（師　父の名をきくこうぞい）まうりなひと刃ハうもそ紅梅よれぐしいろ

わ給のきみんぞ　細見趣
するこそ三見侍し趣たるぞ
みもおり武將給し師。姫
君の背し見拘し枇杷なる
ともつとつふうや

えつくのひそくしよう
師た推中将の詞也

やけのきおはのるさへにより
ゆきらうしくハ給侍よ
姫君達のおもひ給し侍之
孟なにハまつらく　細　えおよ
よみすくてむつとをまと
こうりて細く侍らうこ
ほらくし拘中将よりも
弁ある。設なよそておき日
方様の路よおかつる機之
わうこれり

ひとおりなる　細　拘あ京
まことよよありうきと
し孟野西丘の女院よまい
らせんとおりしまうく

みく柳のやうにしなへくとらおい
（孟かせいのさくらさく）
とそひやうまするまゝめしうとさうるらさ
してをのりまくむかうさけハ思きらうあ
（細姫君へはまいり侍し）
へまとゝめかひやうるうなまんへべらまうしとも
ぞひしゆきんへつかはしあらむ絡しそしさしむ
ひきへるうんざしれべうしのうるまゝしるさら
どもいとしまほおりゝ給侍のひとこなんぢ
（細給侍の兄し中将弁の）
侍くそらうきふんひ給まおよ君うら
（君二人に）
うしのぞきそて君ぞうのゆかへことよよ
おりよゑうれどのるんそゆかされよよるさ
やらそゆかれくちうき侍しそつる弁あへ
（細給よ君来給し）
ハゆきんへうんへてまうりあるうハ代ぶ中将にハ
（姫君はうちう）
（よ仕侍りてく）
仕ののそかしうなり給う侍よ人へよとと
（しくて給侍よ見とのうかう）
あまうりハいにしやいふすさりゞうらのしくもなれ
へつまへぞ弁ある（大中弁の局）ハましのくわこうしのえつ
（姫君達へのうち）
（姫君達のゑ）
（味え仕侍すて秋の君仕）
へみとうりめへうさ見しよさのくやつめうかり
（仕侍らと弁かゝ枝しく）
とそんなをし給はぞしうらしてそらうひ
（かうしますく）
てかいさうすうへいとかりしけなりゝ肉まる
（三ひげ君く）
ほるどもよりありいとぞも若夜のあく
しまさあしらべしとおほまへしうらしこれ
（細中将く）
わくこともなじぞくまてことなり給はなせ
（姫君達のうし）
八の給を拘しまへべいしうくとのひく
（ひげ君のく）
うのわあ侍くどいりそのつきし、へゆかりしそこさ
てしゆさらへどもうれとゆりひみしつまへ

ゆきさすくおかしきありし
兵ひめ君くちのゆるせ
てとられしを中納言
のらんくむりしわくるひ
きひしうとつひかるそこ
へハわつ君の　細むら勇
いつわりとの君のしそご
めあひしくしく
いとさはつきのしらねど
細 幼童の附徳のしる
まそのみやかるらし
くどくとし
此さうしの　河童雑志
成人　園林半喬木集　騒文

（細 姫君をわくせく在まつり）
里ゆきへの花の木だの中ゆりの日ひまさう
しゆりしききうしをゆしきそし。月のよは
（中将の月）
みどそてるごりそめるひ綴ると婦きさな
くゆるしまるらし時このそれハわかぐしく
（ひけ君之 嫡女之）
とわくるそひまひしと。加殺て姫君の返歌
ぞしささめすふへハわつ君の此木とささ
（三 中将のまろ勇のる）（乙女の嫡）
めあしといとさ帰るきのくおゝしゝと。やさ
（と姫君をハゝりてまつせまを婦ふ之）（動ま之）
うしぞひまへしるやしそ此桜の花
本よめまろに付ても。ことはきうそ
（孟 文舞…中将の玉勇）
ひとそひ君へいづれハ。おかしこの人はとくれ
（斜て後ま之）（孟 後りお世ハとめゝうしと之）
侍まセう男のられへもとめりうそ
みじすうとよりひききてしまし　側

けさまくひそくハ
許 此泉院の御んとさ
何るりまつけてゝむろ
らよゆめへやりんあ
ぢしてとあり
臨 へまろり縁りんてとい
許 此泉院へ姫君の来り
しまりんすとそげける
きうしと兄弟の人のア
縁くむろく對して東之
ほや

（細 中将のろう之浪人の事といふことて）
里ハのぞやうよかつてへのむしまありて
（細 花都よ薬）（よの縁やとし）
今ハ仏かりうまとこゝ縁りねと、花よん
（孟 左中将ふて歴くの母まて年より）（ハおきく）
とわくりのし浪人の君らく此ちのうさ
人の此やよめ縁浪年の縁をふらりハ随
ありきしけよ親さうりのれりくうちと
（茅之絶）（細 玉勇と云孫）
うえすつり、冷泉院のこゝくハ此わくは
（ままなし）
此泊る縁の親ゆりしう着悲しうそ
出られまれハ。すみつけてゝかしゆるし
めぐらして、姫君の浅ましく悦ありがたに
（吟之）
ゆかう縁みぞおりまう。院へ来り縁りん
（細 兄弟をも中将ふとし）
こハ此君をぞうちりのくらへるまさこう
（当今へ…）
うちそまへそれ。しろかわのとし時よつけ

ときよまうひてこそ
竹苞のあくへ乱そあり
いとふことを院されと
ゆくゑこそ真もそへ物
されこそ
ゆさやとしめより
細夕霧の第一乃女の女信
よあうまうしこく師也
ろうのこくく

まうそこそ世人をゆるすめれげよいとし（かうひろきやうよあうませるも脱屣されていとし）
ことなしまつ御しきさ院のうち海いはずまよ
あどひるく[illegible]つまとそめれどさうりな
らぬ人らぞまうや。琴酒のともくへ花鳥
の文をともとよ、ところまよあくさうひてこ
そ。人のこくよをしよせつりのするれ。去ゑへ（細中将をうらこ）
いうずとりまくへいづこやとくじめりちやん（のゆ給へ）（むの句）
ごとうさ人の。うこころしもえのうこやそうてり（孟 ろきつる人のうこさやうはあれとも）
てのこ物しまふめれど。こそ。あう[illegible]くふく（あまり宮の弟住しそ時よ）
まうらりんいむとつてく人。あうこうれるう（もあうそくこく）
こしりやあるんとつまもれど。よの花（細 上わ御事へ）
うせまうは。もりとまの。ほにもこせく

雑とらけ物 細 花の王荊公
ごとくとひろく真あるる
まくべ宇治よ萬とう
けれよもろまとあり
花 宋朝よ王荊公とふ
人鍾山よろそ蘗秀
と碁をとこむ。梅詩一
首と賭ふす秀をまけ
く不能作詩。王荊公代て
作まうすあり。後代
のまうれど花とうけ
物よもろくすね物よろ
もや

あくほどく今はうひあうさ海よ。うりてぞす
まそまいとるどの給いぞくこれ物哀るこ
中将すどことうまで縁。悲逆いこうさ（晩 朱雀院の兄こ）（朱雀帝之）
まゐるごこしら給。着ことうあうとうひまうさく
らとうけ物みそく三それよりじこひこうわち（三番よ二番らうさうこく）
給りん宮よ。花しとこよ世そんとこころられ（三 孫子をうろりんこ姉妹の）
しこくこまつらしくうるれば。ちしらりく
てうらこそ給。こともうこさあげく。人ぞ（法事このつ）
うれいどこねん。じや。の色。ありきを削の（名残りにうらまてと金まうく）（細 あ人）
かね。御後の末乃ほづうしよこうりうう（かねへあうしの御後の方へ給りまうり）
沈しらつれて出給よ文れば。大うく人。なく（細 御後とも中将寺君のおつれて出まうて）
すくみよらうの戸れあくさしうろよ。やとら（蔵人かねく）
十七

仏などのあらハれ給へらんに
師 仏の御世にまうあひたら
んとおもひつるさまと
なり

あやめもそれとみわきつ
三姉君の衣裳桜色なれば
それとみえしと
なり
ちりなん後の
河 桜色に衣はふかく
そめてきん花のちりなん
後のかたみに 師 古今
八條(?)のおもひよそへたる
也

右かたせ給ひぬ 河 高麗乱声
聲 高麗ハ右のまひのかれ
右 細 高麗の楽にて
馬の時右の勝ちたるよし
右の楽をするなり

よりてのぞきけり。かううれしきをり
をみつけたるハ、仏などのあらハれ給へらん
に、まゐりあひたらん心ちするも、はかなき心に
なん。夕ぐれの霞のまぎれハ、さやかな
らねど、つくづくとみれバ、さくらいろのあや
めもそれとみわきつ。げにちりなん
のちのかたみにもみまほしく、匂ひおほく
見え給ふを、いとゞことざまになり給ひなん
ことわびしく思ひまさる。わかき人々の
うちとけたるすがたども、ゆふばえをかし
う見ゆ。右かたせ給ひぬ。こまのらんじやう
おそしや、などはやりかにいふもあり。右に

しつゝ云ふかれきよ
く 師 右の方と唐楽と
こまにて
右よりかせくみしの御前
へよりつく 西の御前
いとハ妹の方によりたる
さくら花 御方の木とこ
なれバ、のちの御まへよ
おりとひめ君の方の木
よりて年比争
ひらんといひつるよ
西の御まへよりといふと
云也
年ごろの 細 かほるのこと
師 花とりけるまでかほ
るがつねにあらそひて

心よせたてまつりて、にしの御まへによりて
侍る木を、左になして、年比の御あらそひの
かゝれバありつるぞかしと、右かたハ心ちよ
げにはげましきこゆ。なにごとゝしらねど
をかしときゝて、さしいらへもせまほし
けれど、うちとけ給へるをり、心ちなく
やハと思ひて、出ていぬ。又かゝるまぎれ
もやと、かげにそひてぞうかゞひありき
ける。姫君達ハ花のあらそひをしつゝあ
かしくらし給ふに、風あらゝかに吹たる夕
つかた、みだれおつるがいとくちをしう
あたらしけれバ、まけがたの姫君

さく〳〵ゆへ　細　かひの海る
とうしハおふでとそのうひ
みしくくむ泉男よハるせ
ざりィまーとやう。師風あ
らしよりひくまりくよ
めりやへぞもりひろしと
そくく風よハ花ちるの
さつゞしく
くしくそて何ハ　三　咲る
あへどちる花なれど我か
このあしくえぬも恨る
しくきり
風よちる　暁残なかりしハ花
なかく我がくまうきとこ〳〵
まうしも木あかくぞ何は
三　風よ花のちるハ普通不珍
花ハ定めて遺恨よ思ひ
まし。花ハ峯桐の根ともと
えどこちらまありても
んありて池の汀よ　盃あと
とありても我うきまなれ
とも汀残りもあるごう

盃　須磨の姫君へ
さく〳〵ゆく風よちるのちるべくれぞひ
細　ある君の前へおおてえハと落ちにける
ぐあるさ花とちりくれうこの峯わか君へ
峯桐君
うくまそて何ハちりめる花なれバまち
姉君よ方人をかり
とかくさうしきとこど。とゆのしまわかれ
ハ太の姫君
中君
うぜよちるとハよのつれ桜なりけり
三中君　播方の人
ちふ花とちりがらかく。ちれけるのた
ゆよのこと
大補君
んありて池の汀よおちるれあてしみ
童女なるへし
つそもわがかてまれかりこのわるぐ
ありて。たるのちるよありさてちるよ
とゆしゆくひのてりてまつれり

ろやの風よちられども
三　と界よちる花とまと
そうくの袖と前まよハ
えしうりしきくしうろ
つめてハうさまあ何おろそ
く
さちる花　細　袖をまやと
ハいつてうつりんとまり
師　花とろうの袖とぞ
とも風よゆらりゐ花ふ
まうとあなり半把とえ出え
の前乃大前中もえにと
まさく出かぞちろの袖
とみとちふあ前とりそ
まれり
女御うちくるく　細　女一宮
の母女御也。ちりく花くハ
我をなの

播方の童女
ゆれそくくの風よちれども　さくらる花は
姫君のりうへるまし
が桐とそでうき何めてちる。庭のあれき
みれさ
桜花前ひあきこまちりこうとゆりよ
細　おの前れとあがりとぞの句となし
ぞりの袖ハありやハちるをはけりよつる
も水かのの袖とうきぐ物をとく
しあめれあるど。いハゆもとく　いその月
細　くくして姫君と
うすくそぐ涙をも東くるめくさうる。
盃　冷うる　にくるせ
んのこのハよろ何よゆけど。涙まり八流る
まえとう
うまと思くよあり。女流らくりく入わ
仏徴底の句
しへちりまやらんハちこまそてうしと
三　う実の作るけるも女流の分ハ遠慮とし
おかめりと。ハとゆくけよゆけしの絵人
いちらめれゆとくろかうた御ゆのうくけ
この比のかどまゆりしきるる。そのでいろ海

みかしきうきをあくバ
細人のまをやふかうれまに
れおびるすとく、三やそ姫
君のうそもみがしき
べしとく
るはるくまあ左せまへ
かねと舞よハ不足よ岩
べかれバはぐしみとみか

やどらとみがしきつバれを
不足とこひずくあく
姫君をゆかしまゝとく

山流まりうしく
三 仙洞への女御まりいたこ
まし 盃 山別とくしきう
めそ舞人かねを中君と
まつうせしとく

みそこそ 細 いりうと君
うハみのひろうべくも
なきことなり

（三 おろくのん定わり心有世つゞく）
めやりはうてしまゐらせてゝよこそは
（とそこまり）ゆんもうしめいでとりうあやよくみの給
もうしじおしるじゆがしうらおでこう
ぐるしくそうしきとうせまつれぐゝでぐ
のさうぞくあまくれのそうるゝさこしと
（細 雲井上房く）とぞいそぐ給られまくゝよ花人の
（盃 雲おもりの細く）おねハしあゐぐらうもひく母小のくことを
（雲井の心）めすれバこうゝまづくひまて、いしくさ
（異 おとろうのうゝて）つらいてきゝゝまつひそおのめうしさ
（盃 引分人のおやのこし）こゆうも世まりうくてすさやさ風はまよ
ひよあんみがしきうきさとあくゞいとよしん
うりてあびるぐさあさせまへるぎいしかお

（細 おもろしのんく）しげはうてしまふと、なうしうしも、のりう
（細 おもろうの狗盃 おろの雲之）るゝいうらうけきまそ、いふるうゝしとゞ
（吟思よろしく）ふあんへさぐむしふきやうりまうき残流より
まりるゝくの給ゑすまうよ、みりひ多ことれ
（三 上実のくさしかゝく）るん、まおやうるはちもんすうハ、武部と
（勉めさせまへ右のにおゝう中君に是）と学てしうげめて、あずくあきくし人をは囮
（まつしせんのかゝく）よもそまて なるん、よのさうてりおゞうく
（おん第低地无須よらけり）うすしんなゞし給とこの仙魚りとうぐし
（おん笑かのらゝく）て中の君あまし出かもてなうへ、しいさうしあ
（井の流来と一盃よか将への子わらんもかゞとし）いなそしいうるてきうりがれるうん、ゆうしさ
（盃 舞人かねのるく）らしねるとも、あうへしるねじえ絵うどそれ
（盃 かね之中君よなを掛まのゐく）がるそよ、地もくんさうしよきうそひうつる

例の花陰のさうしに
唯 彦人か将かくてかな
の物陰の曹司よりうり
まつて

うたひとり川 治 集取
嘉 業の文と友竹陰の文
ままと彦人かねのとうそ

つれづれて 細 かれつの長え
箋 かくて八業表の本き。
のよふもくて…業
の月数の…

君くとめくれば、時のまよ見えなりて後ハ、（帥来とく）
ありけよ思しう。いるすゝ人あゝりける
のとおかゆつもをうよめとうらんかぜわかる（三後ハ北まりの治定ならぬとのこと）
えどもひるけまほしうりきうしつうひ
るまてうちといえんとて、例の物陰恋しう
しまさうれバ源竹陰のかさとてそかねま（業ハリ帥来ハへのことく）
つりきう。ひとうくもて代さるめりとえそ、（竹陰の文と）（かねゑんへ）
うたひとり川ことあらかあやしと思さ（有竹陰のこと）
いうちとうくもぞきさこころしらくて（業の文のをえ）
まつうとめしけよもてめつゝり
つれづれてとらう月日とうかゝへつりの（業）
うらめしさ業のあうれ。人ハりそのだ。（細かれのこと 業の文秋とさつく）

あすまうくて雅為月日
とうかく人るらして法まよく
浅人北来りのまうしうら
めしうきとえ

例のかし中ねの地りと
唯 雅表の女房と彦人
か将の文をかげつてかる
人なり 細日
こあるま女せんとく
唯 かりうの文と雅ておう
づうの女人竹陰の御くと
彦人の見てうろうるえ
しうて

このま人かうしも 細中 三中
…

やうよき由をくねうさけるあれ。わかりと
人よもうかれうるうろつくれとうらえハ
めうれく。あろかりそうくれまうと（三例の文よりてよのこと）
おすふも。ゆかいて志りまいれかしと地とといれれ
で。例のうふ中ねの地りとかざうしのう
うふゆくとも。例のうひあとりしとなりけ
さうらるか。竹陰の君ハうの北也まをん（有竹陰と）
とそうく人よ条りの絵をうよ。いとかう見て（細 かつうの北ちて）
うう花やとうくれ。わりうきうらうよ佐ひと（細かねて）
へよ物ぞ思しけり。あさかうしぐかぞいう
こまりけいだうのま人ハゆしもあゆりさうもれ（中将の地りのこと）
ゆうりいとめしと思うあけれいる人もねきく

つゆときを　細　引手玉鉾

しられしくハ[illegible]こと
[illegible]つうさぞ
[illegible]
[illegible]　咲日

けよみの夕ぐれ　細　中将の
[illegible]基[illegible]
[illegible]
ハかりこの[illegible]
[illegible]

とゞみ。めれどのかんぞそし夕ぐれのくと
[illegible]
[illegible]。義[illegible]
らん[illegible]
わかれども[illegible]
[illegible]。義
[illegible]
[illegible]
[illegible]。家[illegible]
[illegible]げよみの夕ぐれ
のかんそう[illegible]
[illegible]
ひく[illegible]

むかしよ[illegible]
三[illegible]
[illegible]
[illegible]中将の[illegible]根
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
らこうけくうゝて
[illegible]
[illegible]
人の腹[illegible]
[illegible]
三[illegible]　咲日

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
と[illegible]
て[illegible]
[illegible]
いそやすそうぞる[illegible]
ひるよ[illegible]中将[illegible]
[illegible]

いそやかぞ　三まりめどのみ〳〵ありけれ[illegible]ぬ[illegible]ぬ男よ竹ねら〳〵
細吟泉院へまゐりまし六　吉男殺すちねゆへとあり　師　いそやかでハ[illegible]
やとくかくれ男よ[illegible]けどの[illegible]とゆへ
まん[illegible]や　細[illegible]
よ[illegible]せざるなり。助云
と曲め[illegible]とあり
孟囲碁の[illegible]の強弱によ
[illegible]勝負[illegible]れど
[illegible]
と[illegible]将の[illegible]　師[illegible]
[illegible]殿の[illegible]を
[illegible]
表[illegible]　細　女将の[illegible]
き死[illegible]せさ
[illegible]
八[illegible]姫君と[illegible]
師　姫君と[illegible]
死[illegible]
[illegible]ゆ[illegible]
此三首ハ皆碁[illegible]

嵯峨の[illegible]
[illegible]やつ[illegible]よ[illegible]けりと
[illegible]　蔵人かねのかし
[illegible]いつゝかさん
ぞつゝりけり
蔵人かね
あゝれそて[illegible]とゆるせりし[illegible]
君よ[illegible]すゝりハ男[illegible]ハ[illegible]　地
ひと[illegible]ひ[illegible]の目ハ卯月[illegible]　細　夕顔の[illegible]
[illegible]れバ[illegible]の[illegible]　師　夕顔の[illegible]　蔵人かねハ[illegible]
まつりさ[illegible]　細[illegible]
[illegible]れど母小宰[illegible]ハ[illegible]
かり[illegible]流の[illegible]　細　夕顔[illegible]　細[illegible]

[illegible]
師　院の[illegible]
あれども[illegible]
と[illegible]
[illegible]
[illegible]の　細　正月
一月よ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]　細　[illegible]
し[illegible]死[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
の中[illegible]

[illegible]れん　細[illegible]
とお[illegible]
[illegible]の[illegible]　三　夕顔の[illegible]
[illegible]　夕顔の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]れいの　細　蔵人かねの[illegible]
蔵人かね
[illegible]
げさ[illegible]
まそられ[illegible]
[illegible]
人の[illegible]
[illegible]中ね[illegible]
と[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]

うらやましきことそも
三 枕上の人とふ所に振
関家あり人もとは下にては
ゆかしてまうできしくむか
らの葉族よあらは舞姫
の素なる也

ふそなる 細 公男にとり
ありてその家なる人
のうけかりそ日ぞ知と
おもひわれしくあり
二が将とことものそらと
強う人しちひしよ花よ

いとわりなしと思す。此ごろの心のうちは物思はしき 細 中の
まりきめて人の心うごかすく（く）しきより
人あひて此わたる。けれはまりてとき（を）まうく
げやうまゐりしんりしも。めでたくしきと
とうざうりなくきさまでも。さく人かにかけらく
おりすぢ海よ。故殿の此ほとしそとそさ
つまりのを。浣よまり給ひんずる。ゆくを
忠のさるべくしかうなむ。栄てうちあり
也。此れふそとりこれて衰ふる此をし
なつぞさうさとゝおぼしける親父まて死よ
ひとかけし人り此。あれいしかきこ。こそ
かれよのことしとり侍すれあひへいへど

しめてえりかうことし
ゆかれく
ふるさびてきこえてそ
作侍人のきこえはの
といとかしけれど答ま
かく人のさまをしなきを
つうしきとく
九月しそまゐり給
細 四月九日之尚侍の嫡女
浣の女御よ参りあり京
梅壺皇后の例之 後太上天
皇納妃例 寛平法皇以京
極皇后為妃 九大臣時年
女
おやかう 細 雲井雁の父の
わかうし もとなきやうなる
人とは族人のかねこの姫
君の母北の方 と弁傍
さらとなり
うまおもりとしも手もな
うりなと 細 御孫のことへ
そなゑとありも地かうさ
せあふべきことそなる
りのとこく

なさけありてかきたる人でぞ。九日みそか（あ）り
給ふ。右の大殿。此れは海ごとんの人々あま
とまりあへりか方をうしめしと思ひさ
らく人ど。それもさとあくかれに。
此のかへりゆゝしきやうなるをひきいれてと。
まうさうしきをこそあれば。いけり細
たゞしき女のさうぞくおかきとまれあり。
わかうどほりはらにてあてなるすぢはおとるまじけれど。
人のありさまにつけておもひの外にこそ
さ海りもとしもなくもありけれど。お
どうかさせ給へぬも。さらにくちなくて人と
ぞあつけきこえ給へりける。わかのめ

私の方ハ　細此姫君ハ柏木の君と別腹の兄弟なり。
中将かたりすも指る
ありし之
いづくまつけても
師おもふハ紅梅のせぐ
の兄弟之後へまいり給姫
君し柏木とも兄弟之　細かけ君
蔵中納言ハと
の息柏木同腹の兄弟也。
みりしいゝる例ハ柏木え
同兄弟あれども

しかるとおもしろき所々にも御心よ
せあり。こゝかしこへまゐりつゝ
よろこびにて給ふこのことしぶしぶ
やうようとて君たちもすこしうちとけつゝ
さぶらひ給ふ。源中納言兵部卿の宮なども
また情ありておはしまして給ふ。紅梅の大納言
殿よりことさらの御車なれば、かの御かたも
ふたりの姫君をのこし給ひて、左大臣のむすめ
あまたにものし給へるを
をとこ君たちのうちにも
かれども、いづくにもつけて、とりわき
とう中納言は右大臣のおほいとの御ことにて
弁のおもと給はりしに中納言

給はざるとなり

いとゞめづらしく見まゐらせ
師やがて入内あらバ姉妹
ハ一所におかせ給ふまじき
まじきとおもひ給しまふ
侍るべし

とやかくおもひまよひけるほどに、よつけて
あくるとしの蔵人の君、例の人よりはこよなく
心ばへをかしくて、いつもつかうまつりしをい
命のおもはすなりしことも、おほやけの御くすり
ざまひさしきの給ひて、いとよくけしきとりて
られて、さばかりは、いかでかくはかなくも
ありそめける姫君ばかりに、あはれなる御ありさ
まをもてなし給へるを、姉君は、いとゞよろしき
御ひかりのごとくよろこびて、中のとの
うち給ひて、いかでかいとゞすぐれて
さりのおぼしかへりぬる人をかならずひ
かへすると、わがみをおもひなげきて給ふ

おぼし知らるゝの　細 此意人かね
は父母相見ていかゞし
きこえて何事とも言
きこえても猶さきよりの
おもひとするもののあやし
きこと。よのおぼせまし
かばとこそ思ひけれ
かくり感じきこえて
[illegible]

かくれても　細 此今のあはれ
今ハ今の限りとおもふ
さまざまの世の中と
[illegible]
とぞ一言のあはれせりと
[illegible]

ゆゝしき方なく　細 今ハ限りとかりしとなりハ　師 今ハ限りと思今もあかぬを
こそ世のつねなれとありひとしも　花
ありとかりしとかり
細 今日深く念ひ給ふ
めしよせ給ふ 此 是の感
とさへありしかうしと
人のかくしたまひし　細 意ある
[illegible]
つねなき物にいひなしを
たゞ此方とりなして
用らるゝあはれの心も
さへありとこらさる
[illegible]
いかなる世の　孟 一つとききつ
でのよそとまさなき
とやかくとと　師 いかなる
ようなる物でとくあれと
ありけるとを思ひきこえ
のこなたよりあり
つらのよし　細 季の記
河海ニアリ。豈不究
倍語ニ心季 とふ 語の意
と見よう　河 史記ニアリ 季

かりそめにこちらへはあひ　河 姫君の…
ひきつゞきまかでさせ給ふをもえとゞめさせ給はず　細 内侍
しの給ふさへあるまじき恥なり。いとゞ物をおもひ
るかはりていかで。さりてもなくし給ふの　孟 文也 かたの
このたびはさりげなくてひとつゞきものかりし
けるは御中にまかでさせ給ふひ
いふこともあやにくとて限りとわかれぬ
きこえさせ給ふやうなくこのさまのうし　細 此今ハ限りとかりしとおもひとある　三 かねの文なり
り　孟 姫君の
かくれてもつかはしのひとことを
いかなる人よりかのそばゆかしきこともなく
かくれのちあひたてまつりきこえむかひて。

ゆゝしき方ありしとかりけむりとなんおぼしめし
かうやれてはなれしかりしとの給ひを　細 中ねよのまうけ　師 … 中ねのあれ
とりかうきみめかしくて。わりなき思ひ　細 かねのへ　睡 かねの心
しとものなきかへすべきことまうで
言ひそれをゆかしくてまかでさせ給ふ夜　細 やをれまうで
しくて
いかならむのちをはかなしとおもはれて　孟人かね
やあまんかあこしつかのへかもりけるか
きれんの稚ともひきよせてかけかせ
かくのつかれぬるとまかでさせ給ふ　細 姫君
てとりかへしてけりまかでたまひてやり
　細 書殺めあるてやり　の例　嬰 又かねの又かちと姫宮のかへて
つれなしとかかる見えしとて物思のあはれ

札之初使北過徐君徐君好季札剱口弗敢言季札心知之為使上國未獻還至徐君已死於是乃解其宝剱繫之徐君冢樹而去從者曰徐君已死尚誰予乎季札曰不然始吾心已許之豈以死倍吾心乎

ひさうちもいそがれ　抄 季札がごとく死後にも信をかけんとならばひさしく死たるも
ござさもあるまじ　きこと

光女御の御方よ
弘徽殿姫君よそひて院
まいり光致仕の女のごとく
の女弘徽殿女御の御方へ
おなじく

つどうりぬ。やかれわたるもめやすかりけり
とくのくれさり。大宮の御式ふとハ内
まいり給ハまじにかふらこるをし。光女御
のいりまいりあそびんの君ハ御物語る
どうらし給。御心ゆけつるんよまいうの
おりあひまづらふ。女流るとされうそハ
へくれびまつるよいとらうしげなくさり
まそどふあり。海とこはりまふえおど
てりいとろうりんどるやりまとときこめ

うんづらて。かやもくりてまするこ海
しりぞ。げよわしまほしうめそこうり
まうらんのこころ給ふらしさふりひまうらん
とこうろとぞめく見てもりよ。いしとくや
よろいづ給ふきれバけわうらんらしに見
しうり。源物語の君とハ明暮おもへりめ
しまわりしつ。げよふぞ前のひろ源氏の
ゆひつぐ給しよ。ゆかしめん人の御好ぐる
つま。院のうちにはいづれの御方みちもうと
うしぞうれましらひありさ給。どの御うち
みもころしとあらかなよりてさして。
ちうさふはいつまさ給らんのらろうさ。そひ

前のよて前のひろ源氏の
御斎の宮よ。源氏と帝の
まいりまのるとりいそて。
源氏の君ハ御あはうさり給
ハぬとまして恋ひくろう
せまふ御うさハえらびあへまぞ
年どあり引合て宗かえし　抄 冷泉の院
後のうちよハ
中に書よ曹子とまふと
あるよあり

ちうさふはいつまふつ人まうらん
細 むみづらの御方みたく此
姫君へえ御うらへなり

しどゝ之 三葉も〳〵にし
人のうらみかたくし

まけりくぞ 細 葉の奇之
松山の〳〵。秋風の便なき
バ金谷よハあらとまじき
りのどうし 晄 秋乃〳〵
どの花なきバしそよハなど
物ととく。又松山の〳〵そ
しるへるっとこゆかとえこ
秋〳〵よともるぬ 細 有仲隆
の〳〵よハ葉よありせバや
とあひしことよあり
師武隆系ヨリ本さる
ぬるの〳〵と惜りかれバおる
ハあへいくぞかのめりとこ

まつりタぐれの志めやりゐるよ夜ぬ濃とつれ
てありくまゝのれりゐる汲流らくこゑやゝう
取り。夕御ふうよ夜のいとせりうて咲かゝるさ
ぞと。ありの間りの石よ。昔とりしりふく
るゞわねまてり。ま間よハおとわども。世本う
らあしげふりとめつ。りうるふ
まよろうめのしあるハるぢの花ちるわり
まきろ久とかこましや。とそされとこあげさう
ゑしれるど。おやもく衣よ心ぐるしくと
おま間ゆれバ。秋〳〵よおしぬせのありる所
よ間のめくそ
雲のいろハりんどうらの花ちるよえ

をもてり。わがみよハ信せ
ぢうとく 師葉乃
あそゆりのるる之案
すぐくるぐ人任すゝぬ
とあてし葉ふしたる
ひるとこあらし 三 初人
あかるそのこゝろく
あかねのここえ し も
三 しもの細文つてにあり
葉ハ菜よあるをが将ハ
しも忘れやこく

院よりへの意望を
細かねてハ姫君まいり
給ふく後院奉をとろきさ
え

しそまうせうりゐれがおわるりゑてい
おしとそくり。いとんせどふぞらハむゝひよ
いれぶりしうど。ロおしりへ。せがてせり。う
のか将のこゝろをとも。まあやうよいつまを海
しと。おやむちも志川べくたづめんとこ
すくなんせがしろ。かのし絡し〳〵で。中の
むとらわろふもあり。かぬの志んとハ。母かた
のれらしこまよら。されやとせずりてや
のかりとうて給うせしえそそとつれど
ゐりまてり。院よハ〳〵の志ちまも志てうしく
りとりうかへひまへでこゝのまつりあるく
後。おさうく系くもて。まんく命じの方よ

うちまへ 細 故中（宮）の御内
まいりしたまふをいふ也
ゆしまうらむ人々御の
まふちをなかくかなは
ものなり
此家をこちらかしたれ
細中将母上は師の君を
ゆかりの給ふかごとく
されば世人の心なら
と 師 まへは中将の上の御あ
しろは物の合する迎
されば此業ともかな
らし
細 かくろの
おもひまふをもちもあらん
しまうり

きしのぞきそをもおぼつかなうおぼしげてみ
んまうりつゞうちしらゆはこれをどのん
ぶしをさこしまるさ悔しきなりしるを
くのさきうる人うち御心ばせをいみなう
とおぼして中将をめしてかんの給ふを
これかしさまろうりけされぞぞ世人の
心うちをもかさめやくべきこととなり
ねでかしろ世の中にとかくこともくなく
うち思しうちいかがやうとをもうくもかな
くもて給ふよろ母君をもてその侍るハな
みかしらか身のうちをもおぼさるくおん
ゆとはとりのしと言ふひくらんのまゐせ申し

いつきや只と 細 御勢乃延
まず尊てむりおもひまう
けらま中まにはちて女御よ
をもわん比は室一おく
内侍うりいかしこまりけな
めらを 孟 内侍そハうしろ
をかうそてハかのかれで
源氏ちんかゝらくとてそうら
むまゐせてと 御の朝え
られもくびんなりけん事
孟 おまへめかせられぞ
しそして 細 無但え何
しそ名もよりこ見えへハ
ならうしそとく

ふいつきやきらくいまうりう織めしをもこひ
ずあるしとおゑかうよいとおかしうの給ハ
をしくべらきうてやうきおしらひのゆら
まうりいちしられ御おやあるを今ハへや
をさされおありさ偽あるよばゞりせゆめして
と思ひかりしけるからぐこれをもくおんなり
んへとハおやてのまへしみそをいつめさ侮りぞ
いまひきうへし太の地とゞとびんひくしき
やうよとをもむけての給すれバかり
なん笑をさらんべきうのこしそいともかくて
まのまてふもさはくがい給ひてぞその哲乃
此もせ見めよそしぬりのなうれバへりう

これハ髭くろの事を云 細 富世八
月よみて女ハ内へハ出仕を記
されどもいつもさしつぎ申さるゝ之
中宮ともいふ 細 中宮
のごとくさうらひ給ひしを院
よハ女御もし後せさせし是
と申しけるのまゐるべく
しとし
うらやましく
細 院の女御をおぼしての事
よ思ひもさしも
あるべくも 三 今の女
院よ尾にハ弘徽殿ハ
冷中宮ハ女御はとのひるまん
とく
それ心やすくてこそ 三 是
ハ院の君とあとハ院の
ゆる人ありてとぞ
女御ハいとも 三 二つを之
らうさよ女御と姫君よの
院の女御かよひぬるの事
世ハ冷中のよしにも
んしと御 院の女御も
かゝうしのかたりとれば

后の給ふ事まうせられハ殿もこゝろえさせ給ふらん
いかゞハそうしなさせ給ひて院の
中宮をとゞめ参らせて御けはひいと
女御などハべりしかハ御ゆるしありける
よろしくやうやくうちとけゆきて女
なともさしもえおぼしはなつまじう
あらまほしき人ハ内ハ中宮かつしるき
こと人ハまじらひ給ふこそや。きさきはなり
うちつゞきたまへるところやまさりて
そ昔ありけむあらまほしきかれ。女
御たちいとおほくなりゆくにつけても
ことにつけつゝもえまじらひさせ給ふべき

今女御ハすゑ〳〵の事もあ
らじ人々もろ〳〵とかく
とかくうちのきこえたまひ
御ゆるしより冷泉院の御覧
思召さるゝやうに盃 冷の
姫君と御覧を

梅がえにあはせ 細 梅がえ
うたひし時和琴をひき
し女房なるべし 梅 正月
此も梅がえうたひし時和
琴ひきし女房なるべし

こよひやうやうまうん世のおぼえこそ侍らん
ながら二所ながらかくてさぶらひ給ふを
とゞめおきてハまゐりたまへるにはへらし
月日よりかくてまゐる七月より
はらみ給ひにけりうちなやみ給へるさま、げに
人のさまざまにきこえわづらはすも
ことわりぞかしいかでかはかゝらん人を
なのめに見聞き過してはやまんと。おぼゆ
明け暮れ御遊びをせさせ給ひつゝ
侍従もけぢかう召し入れ給へれば
御琴の音などは聞き給ふかの梅が枝にあはせ
たりし中将のおもとの和琴常に
召し出でて弾かせ給へば

義人かねの中からとる色
ゆへくいぶかしがられけり
所義ハかね十四日づけの
とのうちあるる年の正
月十四日のまへ十五六乃
ころなるのゆへく勝秋
よハ夜かの露ありたる乃
秋秋と何れども中ね
たるべし白露をもつく
十四夜の秋たとも中将よ
物任ね遊ぶし
かとう　三奇游女人
禄法与子法掛着一領
平家ハ宰錦人以上与
子侍合衣登袷楽人江
人名襖一領

いざひかせまへバ此人あらすこしもしらずまへ
はおもくかぎりなき事のかうしてほとぎ
こぶかうきこれたり。扇上のわうへたる
中よ抱のぶ子井筒とまるかひおすら。
を中みをもくれるとえてせまでは
四位の侍従たの平親なり。按察人のか
ね呆人のうぞのうちよありまり。十四日
の月乃られやうよくありるをとよ。御前よ
て出くく。冷泉院よまうり。女清をせこゝや
もと前をもどへよたつかゆしてにまふ。上達
かこうてすらひきこれて多りまふ。たの
大殿ちしの大殿のゐるをたまわれてさ

見給はんゆしと
細姫君ゆみなくさうりん
ゞうひしきまうり
ひゞとまゐつて
孟志都してく年の葉
是の論も定てなき者之

らせしらきげうあり人へいかにもせるる
ともる、内のおほまへよりも、さの院とがいてえん
づらうきまよおひ申して。これ人へ用之
とう中みをも。義人のかねいさ給ら
へうしとおひやつよくく。きのす。白ひ
まする。ぶかりしき。りつ花をもかとよすんが
らまとわれてぶは鶴も二ゑもいでもれら
しるぞあうきう。竹川うたひてくこゝろし
のけるよなよ。はうへ。みりし秋のゆうくれか
まゝしあぞひもおひ出てくれられバひいてして
もとえろ屈くて。滿ぐゑゐり。后の宮の流
方よまうれバ上もそのちすまとちて世話

月ハ秋ふつうちうちよ

愚云 女流のかねのいつまえ

かのへらしく八恋歌の女

とろ庭のさまど女流の本意

ともさうて月ハ秋ふつうとえもり女流の

ことろぐさうや

さうつきもさてひとりをのこ

細かねの心まよふくさう。

発 踏ぶよ飯驛あり氷驛ハ

酒肴ありそこに底ちう

ひうりるうしう

しるかうし葉の色 孟 發横

こくうへうちみうしうる

哢 年ならう人へんそとく。

薫ぶ所とみてくう

御前以ハ棟梁の心きまり

うら過しまう人のとハ

年しけしらん人のまうし

て侍らんか一月ハ秋ふつうちやうけまひ

ゑるりをちらしてあさうすゝのかりてい

りまこ給へんとの本意ありけれバふかひそ

らもあるうさびしひありさそさうつぐさ

をさしてひとりをのこと切めかひ八面

開きくらん秋一秋の前ぐまのうあまりをそ

ことろやあしうらこそあしうるまゐ。

源氏侍従と深かりけれバおほれしうい。

あらしやをそむべきとおもひつらるかけるま

あつかしき前のことくりをとこりを給ふと

うへうちうししうるんのむ紀くあらわさ

をえしわれらかれ給ふかくりてろろそ

われらにもいそしかりけりけんもんらーと

我らちうせうさひかし給へて。いやとさそろ

の中分まよくつくつせ見へれバ中とさとよさうり

給ひのさるまありらう里へ人かりてれい

よりも花やうよけうひいまめかしう一夜

の戸口よまいげしおきて。恵さりぬるらう

人ま相まるとの給ふ一夜の月かけ

うるしわずらわれ、蔵人のかね乃月のちへま

うやきしうりしうしうきとかうつくのうけ

よそつゝまいむくごとや。あるらん。雲のよそち

うくていさうしかえてざりこもでうくうりあ

へんぐ哀と咲をあり。関ハあやなさと。

えおよびやすからぬかくうち頼みて 細 御琴
やこゝはおほやけごと 細 少将の手もとにうち菓のきしむとうつし出しうらかた薬乃
夜のやうこゝはおほやけの梅の花ぐし

すゞしくて 聴 菓の世ひあうとあ
ぐさめて云ともさうすとハ
いふへし 菓とあやまりて取也
小ハ両方の義也
竹河の 細 若あそびしこ
とくゝもあやしくりのとへ
早く下りしうる詞也 聴 え
秋とハ正月に梅ひらく
梅もえうるひ秋のやうなく

みだれての 細 菓の意也
何事をもつひしらぬ
心のよくかなしうりとを
終末にいまし三はらさ世へ
悲れしの詞もうつね
とりつり

細月ふけえうらへ師 月は入るなりしとくゝの詞也
月だに今すこしくまなかりしと中すし
なげすゝしてうちより
盃 若房荒
竹河のその夜のことは思ひいづや忍のぶ
ばかりのふしはなけれども
細 涼くおほやうるなきこうけしく思ひしにも関のあうしとし
なれど。激ぐまなくとげよいと 菓の心也 わさく ハ出お
えなくとなりけることうしとひし
らるゝ 菓
みだれてのよのみかしき竹河にみ
うき梅ともひとりふさはりのあくれおう
とし決んでゆりしう。 菓浪く さう ハ出りしうそ

あこゝふとめし出れハ
お見ハれ良所のかこうそ
の寺泠泉院の御前へや
しつてきとく
女どもよくあそびせられ
りかいとおりろりこさる
太の君どもの心うちれし
細 夕霧也 神楽を奏く女
楽あつまりいらり出
らそうしし。宮より作に
みしらり 聴 神楽を舞に
は宴に女楽せんとて楽
卷うくれおしまでに
てあいとしてやなど今
さうしかりたり

細 かおのやうのやうなく
人のやうみとよび給ひぎゝりしりどゝへざ
田の手すゞよらぐりしうなりなかりうち
むつかとくとめしてそ侍れ。あやしこと
三 菓詞也 細 とうもにも
てらら権殿ことのさことめていづれ。
細 院の御方也
そしるまさらどれどまり給ふこ六
菓の心也
まかりまうり お正月十五日也 細 院の御意
冷泉院の論平のあしうよ女ぐゝみうくわ
花 女の御ふくへ
そひそこれらういと面白うらニとたの
盃 夕霧也
やどのうくれしあよづともうのまさ
風流なしと 源氏にお清く
つゝのさしつぎなるべきさんかうく激よろう
盃 梁上に下し
よろりやいと物のどんずなる女さへ出かく
あつまりていらよそうるきこうしも出らし
ありまんなど賞しやうるて流しとどうし

御琵琶の女之御方ハ明石上

志らへさせまして、こうへハ宮さま琵琶ハ御上手
ますゆへ、和琴をひきまして、紫の御方ハ
給ハ息所の御こゝしのねがさうこれまりな
さうあらしど、いとよう御へまいさまり
まてゞら、いまめしう風流らしてござ
ごくのまれるほど上手よいとようひさ給ふ
まごうもハ伴ろすくどられさうこともハござ
のし給ふゐ人おめりうもらいとおらし
たるべしとぞれうろとまうゝやうなるあり
めでたきれどもをのうらけどもさうくにて
れもまふらうそでおれくちうるど八猿(?)
けれどもかりくよつけてちりよんのつぐる

細曲ハ楽の曲之
夕まれ息所とおもゆ之
盃ハ息所のうちと菜のの之 二句
夢の注之

るげしさとりとしうも、いうが女御つりく
志ゞくしゝ、卯月よ女宮もれあさくと
げぶやうなり、抱のこへありさまやうろれど、
院のれうこまさくさうひく、ものかえよう
ゞどめでもばうやしるひし給ふ御でも
しりんのえつといでさきりて、御
さ給ふよさうまりあふべきよりのこあれ
べいの御よまりまいぬ、女宮ひとところ
おりしますよいとめでうう、宮の何くて
うそおりられバいとうらじう思ひしきり
いとうぎうるてまのこおりしますと、女ハ
ごこのんでいとくらて、ありめべきこゝ

冷泉院より女御を御とて
冷泉院の御のさそ女にあさりひそくえ
冷泉院の御十日
女宮の院参之
外(?)仏御前の御之

うちゆかりくん
御宮もそわの御んかの内侍て
うちひまうのハにく
くんのえつといでさきりて
女御の御方はいむろうの
御ろまうれハ姫宮と子
ろうのりうそきりが
こうこゝのこおりし
何のおりこゞうりよ冷泉院
のかうしまずさく
いとうらでありぬべき世るる
くらうまハありてあるべきこう

とく、お盤ガの兄すの女房
のおつとよそめのかく
家もとへの流よまへり給
ひとりぐさそれび调へ
さうじとのはんども八
こきでんや御息所のうへ
姿　主人〳〵八皆別ぎる
さく世上皆めば
の中ねの君なれ　細　女御ござ
らうく世ぐしさ事の
出来あれどさよ中ね
のや給しるすぞとをせよ
とおぼづく八地りしら
さるべくよ見ならるとく
くせひくく　「世中を
うくひてくそそくい
いうやいろよゐらんと
とるん
らひくはなしさ
孟内乎らひく中の姫君とと

うるさくてなすしていひ出てりてうつくしう
のれんとれはじしまうくてそくぞむす
給ふはあるゆどおすかくてその中ヲ
らそくあさてもいぐさきるゆしつての
晒　中ねのおさいとひとのことのうく
の給しうなすひてうんの君とむけいの
いひとてのそいうすくいんひとう
へまさしるうりやあてするれんくの
れんとんへあさうくくぞそうへてうひ　孟　秋好中宮
まふれらさくぐうしくそ出ひるうる給
ひうらしうとあるべきうれどとやうそも
孟今上よ八冷泉八まつせ給ふ
内よハまりしよりのしと地りしつて

おれやけさ哉　細　比以下中
姫君のるしく以役とさせ
さそまつらんとて譲位
あつかり
内侍のうことゆづり給し
孟　おの内侍のうことむもと
めよゆづりくまつて世近
あれやけいてうつう
花鄉之　細　内侍の鑑八守
職しうさされどおろ
らも辞せんと地らしさ
れとそのんがらりさ
まうりてゆうし給つぶ
ましとにつて譲位し
あかく
右中く此にゆと地りて　細
思之按次のあるへ商代の始
の開白うそ其後他り
まぐれうりさて一八八令
の方みもしとをあつとく
孟　按源思の忠臣うそ年
むとそのいかけしてとく

此うしさありとく人のうげゆゆれ
つうて地内やけざ海まてまじらひ　中の君と
人くよと思して内侍のこことゆづり給ひ
まふ地りやけいとうりし給うし　尚侍八重職ゆゑ
とびうえしとさうりうじえ給
思しとこ地くのれんを思して
ゆよろ斉の例あると思さいう　譲位
とうるひねごの君の此もくせよと
しびりのひしんうくさめうもり　孟　源氏の
そてうりくてんやもとくて内
志の人うしと地がすふかといとあ　かねの
ねのこしと母也の方れはさての給し

ゆづりの例なきと　三　旧例を勘て譲位しおはしまして、親子相續の例　不打任るとも思ひはかり
乗父の職をおほゆづりを例ともし、内侍皆まかせ給へくはれ
此君の　細中姫君内侍皆に御譲りへきもいはせのあれどなんやさして、今宵も人を
まくてあらんの辞退ともゆるし給はざるまゝ

さ海くよあるからうち
三　院や又内なとへ女君
達のまとらひは相こみこと
ありとのみなよいをうんを
沖やけことにはつけても
細　此役なとそとも其任
しかへしく　姫君女御なとへ
竈をもちうらんあの職
（其あたりは皆なしそ）

に職に付くる此役なれば
くりおくとし上に竈をとう
ゆうへ各別し
又女ひへ中宮
このよびとへ院にそ姿給
のみなしきとそり給し
ともし　師姫君を院へ出
女御にへ女院をてゞり
又今へ中宮をてうり
給く
ゆくなるせましくへ
細　ひげ黒のうをとその孟姫
の出世あしくへ撰擬をと
あるすへあくしとく　三と
しろかあるんざくてあり
とへ中宮と今はとさせ
おじさ抱をとく
さ給のうんの君
細　内侍のかことを譲任あ
そ上まりてさ給の字を
かへとり　三　おもろく
かゆ家のんしのるえ

物ども、このみまのしやうよ御のおゆしまえ
巳に給来るやうにもあらしなとし
えしもいりよゆりひかのうんと思えしあわりけ。
細　あらたるの子なし　二九中弁と後まて久我方へとゝけ給ひし
弁のおもしろくあろうしらやうによ沖らく
細　初く孟　公相し一人は流一人は内へ入られいりくとし
よ思うし給ふらりうり御まへのあれ
ども、さましくよあるからやうあしらひのこ
乃とも世のまくそもいてとそゑおまへてあん。
細　久我方の北くまり
まうとひあるとさてしまへは、内の北親る
師　貸中の北とろめ八大臣とし
はやがりしとうしもしろをことりよあんうけさ
まうがゆかやけいとよりけていゝおつい
給りなはいきうろまじきにわびしまよるなんかしやゆか

しきりべきはよるんとおしあくりかあるさば
尚侍の之
よびへ中宮の北そしきとらてぞ参りあふ。
孟　明石中宮之
ゆくおりせましくべきとしろら給へさく御
しるとおもれるまよどよ代るん。あるへ
白　細　主上
の近衛し
君へうつらうどに君さうろおりしげなり
とさうしめしとをきさりけるとひさしうぶ
今上の之
婦君と院へまゐる
妹君
へ給るとな御心ゆらぬやうしるれとく。まこ
世給ろし
もさまでよろしからぬさ勾し
もいとらうくしくらうろよろしくあて
なすてさおつらひ給さ給のうんの君へてうら
どろへきんと思しさ川なとてくよあう
細　姫君あて
うひへ思しまふ御などよ。とくろうひまらさろ
あはうて志うしてそ出かされめ。今とそうし

いづれかはまことならむ。かんの殿の御はらに、故殿の御子は、をとこ三人女二人なんおはしけるを、さま〴〵にかしづきたてん事をおぼしおきてゝ、年月のすぐるも心もとながり給ひし程に、あへなくうせ給ひにしかば、夢のやうにて、いつしかといそぎおぼしゝ御宮づかへもをこたりぬ。人の心時にのみよる物なりければ、さばかりいきほひいかめしくおはせしおとゞの御なごり、うち〳〵の御たから物、らうじ給ふ所々のなど、その方のおとろへはなけれど、大かたの有さまひきかへたるやうに、殿のうちしめやかになり行。かんの君の御ちかきゆかり、そこらこそは世にひろごり給へど、中〳〵やんごとなき御中らひの、もとよりもしたしからざりしに、故殿、なさけすこしおくれ、むら〳〵しさすぎ給へりける御本性にて、心おかれ給ふ事も有けるゆかりにや、たれにもえなつかしくきこえかよひ給はず。

孟 此故殿は尚侍の…
抄 中将弁君など三人
細 髭黒の…
孟 冷泉院…
三 冷泉院…
細 此息不の心也
ひげ黒

三家絶えて此年
此後と年紀を勘へき
以上件の再び定に準
紀を移てとりあけざ
るの儀此後まて可分別
なり

女御にもあまりうつまては
孟 女御のおし八此源氏なり

しかば雨のさき生まれたまへず
勝ずともかくあるべく

世のこともとしく
細世ろの宮ひ年巻の
ぐるよ為理をつるを
のなり

ひとしくなりまするはる
養秋好と弘徽殿と
の二人は為絶とつけて
家を承ともひがごすにや
なまく孟 女御八人く
崇敬えしきを

此息子の眼に見え
ろありさまに男みしうらき給つそうしき
めくひまゐれけるくまかろうすくて
くしろうはなりよきらどもそろうなう
篤茂
ざりきつ也もくきろど世の人めどろくそ
のみとう 冷泉院之
ひどかりしてたきうちかめづらしとこの今
三条家誕生の家之
家どもひきこしまへうちらぬ給ちぬ
男東
よすりしかりにいりようひあらまし今
にてよにてもたへなすさを代にいとはしと
弘徽殿の女御勝く
なん笑てきる女一家を退るさりのま
せひぬし給しせうくさ西くろう
師殺仕の
うそうとそひのつれはめつかうく
此息子之
まそいとしくみゆがひさうまる人安則

あまりうちまでは猶しくうらに流そう
うぢきよからにしくはあはれさくやそとうくは
くねぐしくさういとくさまでしうく
女御と此息子之
とめづらく流中をへつてあるべくめりせ
のことさしてうちそてさすらぬ人のなうひ
みとしてりしてよりとくらうえうるさよ
てそおいちきさ御同ときもの人もさろと
冷
ようけざらあれば院のうちの上
忠家
人ばいて為んできすくてひさうしく給
つるれりくうまのそうしてつりてそちるさこ
孟此息子をよく以ふ人への事とし
とかも此御方さまにやうつりさら
中将斉意之
しなくすうときに流きうしよの君は逆もされ 詞

跡ゟさきいうへすくて
二もぐれさう章也さらハ
でハ文任へハらうかどと
おぐくの號く所を
じめおぐくの稱おねよ
ゆかしあなた一念のおもひ
まよりて執しうるべきタ
霧雲玉潜弘徽殿の
見むみも恨むよろこび今
上の御こときりへて中将
弁などの御息な給ふとのと
しどへうら給物し給
て世にとまらんハ男も
女もわりくくえゝうきぐ
さるかとのいはるゝに書
てみえきまうむしし
哀しんでの　細　薫人の給ふ
とらじめとしてれ意ふ
わがはしんてたり

ぐまあミつりやい哀しとさきけりといひてぐ
申給ふやもとりしもど步ぐりしきまりてに
くらそのいどやうまめやうてて給
もぐもと人もいわかりうし。限るさまさ
いとひろくて。家づくのもとちいはひうち
すざさわざなうりといわたるへハゐげ
き給ぬしくてのわやをくかわり乃
かりつきてもなかにはるのり
ぬぞあなこなりや。その中よ源将ぞ
ていとひとひはけひちうしハ宰相
の中ねふくいかりふやうけうやとめよて
めぐくさいつちけるいとし人のしもどうり

そそとみうせまりる　薫八宮らし附ゆかし給ても不若へ西ら人く出かりしく
宰相の中将　細　白氏の書は薫十九歳にて宰相となり。三位宰相と同時
とみせらく白ふやりうと同時をさきり史記の筆法くのごとし
やんことなきさみこうら
細　薫と薫よしるべきとよ
しおかこそも出入給ふ
とく

うまんふくこ給へんごとるさきちら
大臣の御むすめなどもぞうしありてみまふ
こりあまたも。出いれどもうどあるよつけ
てぞそのさへりうんりしるさやうな
まうしうさ。おやもくねびまさりぬべう
めりうぐいひおハさうもてかねうし
と。三位の中ねとうひて。世てあらゝさ
ちらんおくまりしりくさやうごとなきは
そうりもさつうちさりんへいひうちき
のびつゝ。うなさげなる御前のさなゝり

(interlinear notes on the left page, as far as legible:)
作もおし
式部卿の宮也
薫の也
孟　薫の深き心こそ
孟　式の薫の御ゆへをさぶし也
細　薫人の給ふし
細　薫中の心にしくとさるはをいゆり
かね給ふゆゑ

左大臣 細 氏族不分明也。
系図に八竹河の左大臣
とあり 三 竹河の巻
始て出之 夏
右のおとゞなり 細 非薫
に按かけるとうへ。
の左乃そをそうひてら
まひのうぐひすのも
おんとぞ申す 孟日参

しかりて一二部うん物とさへく
ハあどりふりありて。いとおしうそうへく
細 薫人かねうりし人三位の中将之
し。此中将ハ物とひそめくしかばらぞ。
くもつくくをもひつく。右大臣乃は
むすめとえされど。ゆきくかりしめぞ。
右のおとゞあうひつらとびのしかへ
ひめもてくださみもすり。いかまいや
三 みな紙地し 三位中の不知
うのあへまうあるせん。家をでおやきげ
うちかへ
うきこよのむろうしくに。里うらよ以給
孟 むのむすをぞよくありけれ 中将上
当然のありて返へいへし
ひまうりんのゑもひしやうおハあ
らぬは 細 あり給ひを口おしと思かゞ
細
物のうくへ
の家ハ中く。いまめりしうこえ。やど
りまりそあしてこふもおりかか

按大納言 細 河海按大納言
のうち九条右大臣の桐のうと
ひくり。太政大臣の弟也。
河貫之集に九条右大臣
桐と按大納言と申け
る執柄の次男なり
右大臣となりて御きく
そ三 載く
此うりの中将 細 薫の事
納言のうちの紅梅の君に
あらわかわか弁の君を
一人くの列侍よれば
年紀と動るに及ひをぞ
仰うりの二十二歳のうち
なるべし。推而考り
中納言よ任せる中る。
此時うりして白き紅
まい紅梅の年り紅
梅の宮くて此宮の年の
表続くするるべし
按 藤の宮うまくそくらし
細 親昵なりけりて
相し子くり 既くりの
えくくの家へまいりて

きこえしかくらうしひ給。細 夕霧の右大臣
まで。右ハ右にも按大納言右大臣うけ給
細 夕霧の右大臣左大臣に昇りまり 晩 紅梅按察大納言大臣大将
まかり
へる右大臣よかまり給。つぎくの人く
かへりかりてこのかりの中ねハ。中納言
よ。三位の弟をく。宰相よなりて。後に給
夕霧の息蔵人少将之 ものに
つる人くせ給ぞうらみよ人うち
細 皆夕霧の一族之 三夕霧に役は大臣との一
おひまうへかりうて。中納言の給へ
葉
よき化の因ぬのうんの右より思うまう。
孟 葉の君そ右大臣家君は若ハ育をえらんとぞ
按察の宮う人く給しすり給りんのゑき
孟 むの物へ
いめんしまそ。うくいくを実ふうく如ゆく
細 かからんく
ひぐくのうずとしふく給を給は給へ
細 法の事之 孟寸 人とゆかりと思れるうねとし
みを見責の給ししひ知られて給ん

しても…
らべきらくもかうね
るしく　師　わらの内ゆ
ひかうしをうくめそ…
ちからか涙して
細わんしらよおすめとを
かうる茶器よりひ色
すつして　盃　茶よ茶の
門とほじまちぬとま
の語うひしとづるよ珠
黒かしと巡わしめそうし
のらくぐしらへさとせまる
しやとそ香ありし
よわうりしのおうり菓
細

[illegible]

抄 さあく業けるなり
三郎なりける子の我心思ふ事を
あはせ男の子もあるにこそ
どもひ出かる我男をとり
合よしく師　女の喜
ぶなりて女の思ふに
これらわざなどさく得
給ふなるはこのいはれ也
経 さきさる事あり闇
三仙洞に閉まりまゐせ
八内義よりて女は文夜の
いぎおしきよりん姿なる
べきとんいひつけれども
おもひきてもおほく女の

らじ。業平の給りそふるかつるぞあらくば
（お業平を請へかけよとなり）母のめしまへしもの人々も母にあらず母に。
まのりしくおもひてしそくて行し給ひ。
いづこともなくさらしらけるのとさ
こしらど。今はかくとるやまりつる。
妙さまくなわけまりけるなり。（業ぞ業の意なるゆゑ）業のよ
とりしくなんとしらすげいのふ我事とくし
（細 かの給く 孟 はへよきけられなし）かうさしよりまで。かの母をおもしきこと
よる人のかはまじらひのやそうくねこくい。
（三郎なり嫉妬の心ありまぐく）者なるさしなり給ふよねると。（經の）
てむげかるかいましまずなぐとものけゞや
くるそはのかめりにいみするみどそん

ちりくのきまぎれ
細 女のなすらば女御后
の御くせ之わがの事
わりましきと思ひく
業俗しくまつぞく出
立させのかへしく
どのくれこそそうれ
ゞさるかも
孟 男がこのどりてむれ
よ養ぞのよづさうすよ
てえりくして業平道之

まへしらとげまゐるやとうるれど。その人く
ちゝらみば。いへどいどまいくくも母そこ
（我の間よいさかく恨こまざさとぶかれとかへ）とももするさん。人へのるすよのとかくぐこそねこ
（あすゞもしく）ともも我女男よとりて。いざいめしくらんおい
るもことよ心とどもし給くし女御后の
つる乃御くせなるべし。さばかりのもてなされ
りわくしりのとそや。業しまらん。そぐ（孟 ことく）
（作接悪わるき）あざくりるよりてそのらへじもとくれ
づきこともよ給ふなり。そのこれ男みらくぞそう
もぐさことみも給くぬくとよゐんと。ぞ
（細 おもくの給ふ）そくくおもてやまへぱさいめんのつゞく。こふ
まへゆかしんと。まちつけまりしとうひ

めぐるのはくとうりや
咲あかくしきえ 細盃目
[illegible]
しの、のひめ君
細 宇治八宮のひめ君
あげまきの君のうし。
咲 椎本卷の中君よ
あきれり

わすく。おはのはこころやとこはわく
ひくおかすらんの世やふかくなるかくし
ごりまへる給ふりハ。いとわりやうよ[illegible]
いろうちらもて。こやまで[illegible]も。[illegible]
ちすへりめり。宇治の姫君の心とおり[illegible]
此ゆくもりう。夜なかうけそらひのおもし
きそうしと。云ひぬまへ々も。内侍の[illegible]
こみごろまでまつりこるす[illegible]
まつるけちひおりしく。たりこのくやうよ
まきごめてことなき流石給どりの[illegible]
うらんそうしう此かぬれど。ちろづるひ
きこれて。いとどりそ[illegible]

[illegible]

こゑうち誦しく　細 愚案
かく家のうちにそのうつ教
花の香にも紅梅大臣のこゝろは
まつはりつぐのやうなるに
思ひしく又此比良崇
をとく物語にいふて
おもひ出らる世の中のさま
面白くいと思へ侍るの歌
しなさるに
もどめるありやいつれまとす
思ふへき 三 按察の姫君
又今時と堀らるる宮
あれども思ふ家の姫二丈
と云ふる家にも宰相
まかりそ又御服の此良崇

のひ。ろうはどしもそられうるこうすく物ゝ
まふと。物ぐるも北方をとめとくめいあいの（細 紅梅大臣同北方也　薫とも此北の方なり）
まし。とゝうりのうくのえぬりて。いわぬ車（細 玉鬘の宿の事ゟれきこゆるなり）
のさしとされそぞふしたぐくも。着のしとむ（細 螢兵部卿の宮の御事）
ひ出られて。このとみ此ほりのあられよ（思ひ出まつるさ）
うるめ給。こゑうちをすて。猶ありくこれ紅梅（おもうくの御事）
とくのうつひ給ひしこと。いとわれりけいは（按察へく）
やうよ世人ハあくるありしうとも。めま
えくしそうくて其の給も此すゝうるさ
しまめやもあうりなう。さごめるの世や。い
ひれよかうる人ぞあるぞのありの大殿の（細 薫人かあろく）
宰相中将大饗の又の日。ゆふつけてうる（云 もろ）

いきやうのうするれど
古将のおもひまうとく不
給いづれようるへき世
ぞとく。まじるとも事はる
とも果報をさらへ
かうくに

しるくめいくり
おもと八此息所のおもと
思ふ段みも此ふ死
とくの
細 おうくのうくこゝろに
うすとゝまり師匠
らの此筆ねるなど緑色
まうもうゝく宮ふにく
ださく
細 蛍兵部
加茂掛たせ
あり古蔵ますます世
らしまぐみ花きちりや
うの香よんとろゑて
まし物とく 三此一

ゆかりまでもやさて所望まおかつまいらと
思ふは。いとくんげるりそそひて物わかつけ（宰相中将の御心）
のうむ君へ給ふろうしへ。何見え。ゝ給（細 昇進のうく）
らぞ。まさくらの思ふしろうすとぬ難さ（姫君のあろる心なりし）
のさ。ふし月なそく。思ふすへうちきん
くるさうしく。源氏のふとごとき
らめいさり。大七八の頃との。いとうちま（細 宰相中将の御事）
白ひかるやうなるもしまうし。うとく
おしのゝなぎりの。世中とうらのやうに
とうりて。いくさうしるとへかなよたと思い
ど。めふしいまもすくふや。宮殿おつとめ（細 まし中すつやとく　ひげ黒）
しうへ。むらくわらへそもうるとさひごと（紅梅の子大夫とし）

言葉を知べし。盤渉
みしらく紛迹をあやま
る物く。言をてちげど
平調黄鐘ちん太簇まそ
黄鐘盤渉のみ左中ねく
平調盤渉よるり。右中弁
八大弁よるらいまご
相参議もそ八座よぶれ
なられ言を参議と申さ
相参議なるを　兄同云竹
河巻よ右大弁参議右大弁
を相参議といふう
一巻　参議よ任せねさ
こさ八相参議と申く

かぞんハこゝしましとぞうちあげさあ
よ。右兵庫督。右左弁かなくこれ邪象儀
あるとこれつしとこう。伯姫とさこと
めうこぞ。比ば姓中将とこともめう
きらひの程ハりくとすれども人をもう
とるげさまつり。宰相もとらくつさく
しく

伯姫とそこめゆうしぞ比ば姓中将　掛言ハ兄弟の中にてたるうめ。師よしよ
のひよわりせらく八宮位のとハすつぬといふなぶれど人をもうと歌まふ之
車まうひ　細　宰数しいまごともうれど母の浜ハ畢まるど本是よ二へまさ之
宰相ハよらく　細　夕霧の息。宰相中将なり。おいろの方へ行つきくもくびり
のちすをそら人殿みて若うずくのしろねちひとそう申し。此相耕雲の事とみへ申し
お玉鬘の住息和冷泉院にもさうひとくさやうりて里住しいふるずと申て宰相
中将ハいかく申ひちなくいらかありてつきづくもく中ねのおりとまぐくとりうそふとうしきる
ひのそしろぞし此おの祠ところの事をそなるといふてまうひあもにもそこと山はとりあ
へらうさうし　盃　たう治ハ別のこと。こ部ハこれまきくきよ伸くさぞ去つきさど。此書
こしかりうわり　体　かぶあり